



井上光晴における「辺境」への問い：1950年・佐世保

梶尾，文武

(Citation)

日本文化研究, 92:57-75

(Issue Date)

2024-10

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(Rights)

本論文は東アジア日本学会の許諾を得て公開しております。

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100492149>



井上光晴における「辺境」への問い

— 1950年・佐世保 —

梶尾 文武

<국문초록>

본고는 일본 공산당 국제파(반주류파) 소속 작가 이노우에 미쓰하루(井上光晴)가 조선 전쟁(한국전쟁) 하의 시대상황에 어떻게 대면했는지를 고찰한다. 이노우에가 당의 분과 항쟁(50년 문제)과 직접적으로 관련된 ‘쓰여지지 않은 한 장’을 저술한 후, 이어지는 ‘병든 부분’에서는 분과 항쟁의 상황을 그리면서 허남기(許南麒)의 시를 인용하여 조선인민과의 연대의 가능성을 모색했다. 또한 ‘무거운 S항’에서는 미군의 병참기지로 전략한 S시의 모습을 향한 노동자의 시선으로 그려낸다. 공산당을 탈퇴한 후 이노우에가 ‘진후 전향’이라는 현상을 당으로부터의 이탈이 아니라 마르크시즘과 자유주의를 포용하는 ‘통일전선’으로부터의 이탈로 규정했다. 후지타 쇼조(藤田省三)는 이노우에가 소설의 무대가 된 사세보라는 ‘변방’이 조선인과의 연대를 가능하게 하는 국제적인 지점이 되었다고 평가하는 한편, 이노우에에게 잠재된 ‘문학주의’로의 경향을 비판한다. 이러한 경향은 초기 단편의 모티프를 종합한 장편 『황폐의 여름』에서 두드러지지만, 이노우에는 어디까지나 문학에 고유한 방법으로 정치가 외면한 ‘연대’의 가능성을 가리키고자 했던 것이다.

키워드 : 이노우에 미쓰하루, 후지타 쇼조, 허남기, 1950년 문제, 한국전쟁

目次

序論

第1章 革命の盲点—「書かれざる一章」

第2章 連帯としての引用—「病める部分」

第3章 戦後転向と文学主義

結論

序論

朝鮮戦争(韓国戦争)の時代に小説家として出発した井上光晴(1926~94)の初期作品群は、コミンフォルム批判以降の日本共産党の分裂と腐敗、アメリカによる日本の占領と後方基地化を、党員活動家の視点を通して描き出している。それらの作品が舞台とするのは、九州長崎、とりわけ井上自身が1942年から55年まで暮した軍港都市・佐世保である。

針生一郎は、井上の長篇『荒廃の夏』(井上1962.9~1965.10→1965a)が完成した際、「井上光晴がくりかえし朝鮮戦争下の佐世保を小説の舞台にえらぶのは、一時期をそこですごしたかれ自身の閱歴をこえる必然的な意味をもっている」と述べ、次のように続けている。

なぜなら、朝鮮戦争こそ冷戦状況のもつとも危機的なあらわれであり、それをおしてわたしたちは、すぎ去ったばかりの戦争体験を、痛切に反芻しなければならなかったからである。形式は占領を終ったのに、国のすみずみまでアメリカの軍事基地化され、しかも戦火にさらされているのはかつての日本の植民地朝鮮であった。そのとき、日本の革命運動は分裂抗争をつづけ、やがてスターリン主義の名で呼ばれるあらゆる欠陥が、組織内に山積していったのである。現在わたしたちが克服すべき対象としてとりくんでいる、すべての矛盾がこの時期に顕在化したのであった。(針生 1966)。

朝鮮戦争期の佐世保は、日本の国際社会への復帰を間近に控えながら米軍により占領され、朝鮮半島に進出してゆくための拠点基地として利用された(佐世保市 1975:297-306)。他方、同時代の革命運動に目を向けると、当時の日本共産党はGHQによるレッドパージを被るなかで、いわゆる「五〇年問題」に直面していた。詳しくは後に述べるが、コミンフォルム批判(1950年1月)を受けて生じた、日本共産党の分裂問題である。この年に露呈した戦後復興の矛盾、戦後革命運動の分裂を、井上は佐世保の地で経験した。

本稿では、「書かれざる一章」(井上 1950.7)に始まる、朝鮮戦争の時代の佐世保を舞台とした井上光晴の初期作品群に注目する。「病める部分」「重いS港」と続くこれらの作品は、旧植民地朝鮮を犠牲とすることで繁栄を謳歌した戦後日本の欺瞞、戦後

日本を革命へと導くという大義の下に理不尽な官僚主義的支配を正当化し、内紛を繰り返した戦後共産党の欺瞞を告発する。こうした主題を展開するために、井上が佐世保という「辺境」の地を作品の舞台に選んだことの意味について考えてみたい。

第1章 革命の盲点―「書かれざる一章」

朝鮮戦争の開戦とほとんど軌を一にして発表された短篇小説「書かれざる一章」は、井上の実質上の文壇デビュー作となった作品である。執筆の直前、井上自身は日本共産党九州地方委員会の常任職を解かれたばかりであったという(井上 1965b:385)。

党地方委員会常任の一員として活動する主人公の鶴田和夫は、財政点検とパンフレットの集金のために「S地区」すなわち佐世保に出張するが、集金は思うように進まず、党からの給与も得られない。食うや食わずの貧しい生活を強いられた鶴田は、肺を病む妻を彼女の実家に託し、舅からは離縁するか一家を引き取るかの選択を迫られている。党員たちの情勢検討会議に参加した鶴田は、こう考える。

なにか、このせつば^てず^まつた革命のほかにも、もう一つの革命があつて、その革命は何処か俺たちの知らぬ不毛の砂漠にでも爆発しているのではないか、とさえ錯覚するのだ。俺たちの苦しみと悲しみ、生活に関係のないもう一つの革命、そういう革命があるのだろうか。その革命に従つておれば、たとえ食わなくても、女房に金を送らなくても、薬がなくても、いささかの憂いも苦しみもない、そういう革命があるのだろうか。(井上 1950.7)

鶴田は、職業革命家としての行動を、彼自身の生活と結びつけることができない。その活動が、いっこうに生活を豊かにしないからである。彼が身を捧げる革命は、空想的な「生活に関係のないもう一つの革命」と化してしまっているが、もちろん彼は現実には食えないことの「憂い」や「苦しみ」から自由ではありえない。

会議のあと、鶴田は家庭の窮状について党員に打ち明ける。草場という党員は、「結局、革命に対する取りくみ方の問題だよ」と言い、「むろん常任費は二カ月もでない。けれどもわれわれはそれをただブルジョア的に、単に苦しい苦しいと言つては、何事も解決できないんだ。敗北主義だよ」と続ける。鶴田は怒りにかられるが、結局は

黨員たちと生活の問題について議論することができないままになってしまう。

鶴田は続いて生活費の融通を願い出ようと、別の黨員松岡のところに赴くが、「給料をもらって革命をやるなんて、どだい虫がよすぎるんだ」と突っぱねられる。松岡が追い打ちをかけるようにして口にした言葉は、「いや、まだ俺たちは苦しみがたりんといっているんだよ。常任は餓死するまで革命と取りくまなきあ」というものであった。

作品は、妻と子が実家から戻ってくるという知らせを受けた鶴田が、草場と松岡の言葉を噛みしめるところで結ばれる。鶴田が胸のうちにつぶやく言葉を引いて説明すれば、この作品が明るみに出しているのは、「生活を生活として感じるこののできない盲点」である。「ポリシエヴィキという名のもとにあつさりすりかえられてしまう、苦しみと悲しみのあふれるような感情の摩滅」を経験する専従黨員の姿を通して、本作は「すでに大衆の真実の息吹きを息吹きとして呼吸することのできない、革命の盲点」を可視化するのである(井上 1950.7)。

民主主義文学運動にコミットした学生層は、井上のこのデビュー作を概ね好意的に迎えたようだ。今日では保守派の書誌学者として記憶される谷沢永一は、関西大学在学中、新日本文学会関西支部の一員として活動し、謄写版の同人誌『えんぴつ』(1950.1~1951.5)の編集を手がけていた。開高健が参加したことで知られる本誌は、レジスタンスを志向した大阪発の学生雑誌である¹⁾。谷沢は同誌に評論「井上光晴「書かれざる一章」読後」を掲載し、井上作品に詳細な検討を加えている(谷沢 1950)。谷沢は、小林多喜二の「党生活者」(『中央公論』1933.4-5)譲りの「職業革命家」の群れを形象化した作品として本作を読み、「自己の人間的な諸要求のかたい自覚に基き、それをもつとも根元的に解決へと導く過程」を追求する端緒を開いたと評価した²⁾。

ところが、専従黨員の窮状を描く「書かれざる一章」が『新日本文学』に掲載されたことは、直ちに党内の政争の具となった。本作の発表に前後して、日本共産党は内部分裂に直面していた。いわゆる「五〇年問題」である。1950年1月のコミンフォルム批判は、アメリカの占領下で平和裡に革命遂行を目指す戦後日本共産党の方針を否定し

1) 『えんぴつ』には、レジスタンス詩人として知られるルイ・アラゴンの作品「抵抗」が掲載されている(1951. 2-5)。谷沢が見出したアラゴンの未邦訳作品を、開高と向井敏が翻訳したものである。『えんぴつ』の動向については、谷沢永一(1992)および吉田永宏(1999)を参照。

2) 谷沢のこの評論については、『新日本文学』(1950年11月号)掲載のコラム「地方の雑誌から」のなかで「力作」と紹介されている。

た。共産党は、コミンフォルム批判を擁護した国際派(宮本顕治・志賀義雄ら)と反撥した主流派(徳田球一・野坂参三ら)とに分裂する。徳田と野坂が逮捕を免れるべく地下に潜行し、中国に亡命したのに前後して、1950年6月に両者の指導下で党臨時中央指導部(日共臨中)が設置された。中野重治・窪川鶴次郎ら新日本文学会(新日文)中央グループは、1950年8月付で声明文「党中央に巣くう右翼日和見主義分派に対するわれわれの態度一党のボルシェビキ的統一のために」を発し、国際派を排除する臨中を「右翼日和見主義」と批判した(日本共産党新日本文学会中央グループ 1951:252-259)。

新日本文学会内の小説委員会は、合評「勤労者作家の作品とその態度」において、「書かれざる一章」の掲載理由を明らかにしている。この一文は、本作に描かれた党常任の活動が「読者には理解しにくい、非大衆的なかげりをもっている」と指摘したうえで、「人間性はしめ殺され、官僚主義のかげにエゴイズムがはびこり、革命的空気は氣息えんえんたる状態にまでおいつめられている。——こんな状態をてきはつた意味で、この作は重要な提案となる主題である」と評価した³⁾(新日本文学会第五回小説委員会 1950)。

対して、日共臨中は声明文「新日本文学会中央グループ内の一部分派主義者の声明について」(1950年8月30日付)を発し、『新日本文学』の編集方針を批判した。井上の「書かれざる一章」や島尾敏雄の「ちつぽけなアヴァンチュール」(『新日本文学』1950.5)を掲載した当時の『新日本文学』の編集方針について、臨中は次のように糾弾している。

彼らの指導する「新日本文学」はいかなる意味においても人民の革命闘争とは無関係な「ちつぽけなアヴァンチュール」あるいは党の権威と信用を大衆の面前において失墜させる効果しかもたない分派的作品「書かれざる一章」を採用、発表しながら、他方真面目な職業作家の投稿に対しては、全然ふりむきもしない。(日本共産党臨時中央指導部 1950)

臨中は上のように、井上作品を「党の権威と信用を大衆の面前において失墜させる」

3) 1950年7月1日付で記されたこの一文の末尾には、「この稿は出席者、松田解子、佐々木基一、徳永直、花田清輝、大内儀男、佐多稲子の六人で作品を批評してから徳永が執筆した」と注記されている。

がゆえに「分派的作品」と規定し、本作を掲載した『新日本文学』編集部こそが「分派主義者」として指弾した。なお皮肉なことに、臨中の議長を務めた椎野悦朗は、1946年1月に井上が入党した際に推薦者となった九州地方の実力者である⁴⁾。

他方、新日本文学会内には、日共臨中に追随した文学者も存在する。声明文「党員文学者諸君に訴う」(1950年10月4日付)を発した江馬修と藤森成吉は、中野らの声明こそ「あきらかに党の威信を傷つけ、内部をかき乱し、統一をハカイするのに役立つものである」とし、臨中の指導下で党の統一を守れと呼びかけた⁵⁾。こうして1950年11月、両者を旗振り役として『人民文学』が創刊されている⁶⁾。

このような動向を受けて、中野重治は評論「嘘と文学と日共臨中」(『新日本文学』1951年5月)を発表、井上作品を擁護する論陣を張る(中野 1951)。中野は臨中の見解に異を唱え、むしろ「党本来の面目を発展的に恢復しようとする勢力」が「内攻的敗北的になつて行く悲しい姿」を捉えた作品として「書かれざる一章」を擁護する。中野の批評は、解決の道を見出せず内攻してゆく主人公の感傷に作者井上と同調してしまっていることに疑義を呈しつつ、党員の生活を無視した革命運動に井上作品が差し向けた内部批判を肯定するものであった。

中野の作品評に先駆けて、「書かれざる一章」をめぐる党内論争に局外から介入したのが、平野謙である。評論「職業革命家の問題—25年度文壇の回顧」では、平野は、戦後に初めて公然と現れた「職業革命家」という存在を描いた最初の作品として「書かれざる一章」を位置づけ、革命家でありながら給料をもらおうという「虫のよすぎる」問題に光を当てた点において、本作が「人間のもっとも普遍的な冀求」に対峙ししていると評価した(平野 1950)。井上が中央文壇で認知されたのは、平野謙のこの一文に負うところが大きいと言える。

のちに井上光晴は、平野謙から得た援護射撃について、「私にとって、この批評はひとつの支えになった」(井上 1965b:390)と回想している。新日文はいわば公式見解として、本作の内容が一般の「読者には理解しにくい」と指摘していたが、平野はむしろその狭さのなかに本作の普遍性を見出している。平野の批評は、小説世界の狭さと局

4) 井上の入党の経緯については、川西政明(1998:180)を参照。

5) 江馬なかし[修](1951)より再引。

6) 藤森は『人民文学』創刊に至る一連の経緯を小説「分派」(『人民文学』1951.1)に記している。五〇年問題に前後する藤森の動向については、中田幸子(2021:283—306)を参照。

地性、登場人物の立場の少数派的性格を井上が堅持したことを、強く後押ししたと言える。一方で井上自身が「私小説的な方法の弱点を自覚せず、克服できなかった」（井上 1965b : 390）と認めるように、この作品が日本的私小説に通ずることに目を向けておくべきであろう。職業革命家の内に潜む、万人にとって普遍的な生活者としてのエゴイズムに光を当てた初めての私小説として本作を読んだ平野謙は、それゆえに「書かれざる一章」を擁護したのである。

第2章 連帯としての引用—「病める部分」

短篇「病める部分」（井上 1951）は、再び「S 地区」こと佐世保に舞台を置き、島木圭介と落合良という二人の国際派の共産党員の苦境を描く。本作についても、作品世界の狭さを批判する声为新日本文学会内部から上がり、江口渙は「何の予備知識ももたない党外の大衆には、読んでもほとんどわからない」と評した（江口 1951）。

妻子とともに S 市に移住してきた島木は、党員活動歴を有するため職に就くことができない。他方落合は、党の決定の正しさを信じたまま逮捕されるが、撒布したビラが主流派を批判する内容のものであったことから、スパイの嫌いをかけられ、党からは除名されてしまう。こうして党の正しさを信じて疑わない党員の姿が、同情をともないつつ戯画化される。

島木は、臨時指導部と対立する地区委員会の場で、落合の除名に反対したものの、この会議そのものが「分派会議」と見做され、臨時指導部に島木の訴えが届くことはない。作品はこうして、党が陥った不毛な内部対立を「病める部分」としてとり出す。前作が巻き込まれた主流派と国際派の党内対立の問題を、本作は「S 地区」を舞台に主たるモチーフとして意図的に取り込んでいる。井上は小説作品を愚かな党内闘争から切り離すことではなく、むしろその汚れのなかに投げ入れることをあえて選択したのである。

注目したいのは、こうした分派抗争の舞台となる「S 港」すなわち佐世保港周辺の光景に、朝鮮戦争が影を落とすはじめてのことである。S 市には、海兵相手のみやげもの屋が立ち並び、全国から失業者が流れ込んでくる。作品は特需景気に沸く佐世保

の風景を描き出し、その繁栄があくまで朝鮮戦争の戦火の犠牲の上にもたらされたものであることを可視化する。

また、S市では、朝鮮からH島(平戸島)に運ばれてきた「アメリカの戦死兵の死骸」をアルコールで拭き、ゴム袋に密閉して本国に送るという仕事の手が高い給料で募集されているとの噂が流れてくる。生活苦ゆえにそれに応募した島木は、これがデマだったと知り、「前衛のひとり」としてみじめさに打ちひしがれる。丸川哲史はこの場面を捉えて、「朝鮮戦争の実在が滲み出ているのは」、主人公が「知識人(活動家)としてではなく、むしろ「生活者」として戦争経済へ組み込まれるあり様を通じてなのだ」と指摘する(丸川 2005: 141)。主人公の内面は、職業革命家としての自己意識と、生活者としての自己意識とに分裂している。作品は専ら前者の意識によって照らし出された日本共産党の病める部分を主題とするが、後者の意識こそが、本作の舞台である佐世保と朝鮮戦争の現実とを結びつけている。

佐世保という空間と朝鮮半島の戦火とを結びつけているのは、作中の主人公の生活者としての意識だけではない。両者の結びつきを支えるもう一つの要素が、引用という小説技法である。党内の抗争の傍らで、佐世保がアメリカの軍事拠点としての性格を強めていくさまは、次のように語られている。

血ぬられた暖流がじかに埠頭を洗い、「いま、その白衣が、僕の全眺望の中に、ときを挙げて迫ってくる。鍬と鎌と洗濯棒を振上げて、口々に何かを喚きながら」と許南麒の歌う、その風が海越えて呻くS港。

昔は東京より中国が近かった。駆逐艦が上海まで一昼夜でつつ走るそのS港。北鮮軍が水原を抜き、大田に迫るその頃より、次第にS駅到着の普通列車の時刻表が狂い、連日、黒人兵が緑の戦闘服でホームにあふれていった。

夜も昼もトラックはヘッドライトをぎらぎら照射しながら二十分間も、人々の歩行を禁止し、午前零時、輸送船が淡い標灯を掲げて出港するのを、涙いつばいかへてはるかに見送りながら、恋人たちは下宿の窓ごしにまた新しい金ばなれのよい彼氏をキャッチせねばなどと考えていた。(井上 1951.8)

ここでは、佐世保を寄港地として上海に向かう米軍駆逐艦のイメージと、半島を南進してくる北朝鮮軍のイメージがあわせて喚起される一方、黒人兵が駅にあふれ、彼ら米兵を金蔓にする人々が群がる佐世保の街の風景が描写されている。戦地としての朝

鮮半島、軍港都市としての佐世保のこのようなイメージが、許南麒(1918~88)の詩の言葉と縫い合わされながら立ち現れてくるところが興味深い。

ここに引用されているのは、許南麒の『詩集 朝鮮冬物語』所収の連作「望郷詩集」のうち、「眺望」と題された作品の一節である(許 1949)。この作品では、引用された上の箇所「彼等は僕のレンズの中を / 一ぱいこなつて迫ってくる」という言葉が続き、作品は「僕は双眼鏡を下す。 / そして静かに涙を拭う。」という二行によって結ばれる。この作品の「私」は、すでに祖国からは隔てられており、白衣が風に翻る光景を遠いところから眺めている。引用の直前の聯の詩句は、以下のようなものである。

それはあかで汚れ、
それは涙で汚れ、
それは怒りで汚れ、
そして三十幾歳の
長い屈辱の歴史と
一九四六年十月以降の
あの激しい闘いで汚れた白衣である

この詩に刻まれた「一九四六年十月」という日付は、いわゆる大邱十月事件を想起させる。1946年10月1日のことだが、大邱駅前に集まった1万5千人の群衆が武装警察と衝突し、戒厳令下で流血の惨事となった事件である⁷⁾。許南麒は事件そのものをモチーフとした「大邱詩集」(『朝鮮冬物語』所収)のほか、何篇かの詩でこの事件について記している。たとえば、長篇の叙事詩「六人の朝鮮人の歌」(許 1950)には、「わが祖国の中に もう一つの異国を築きあげようとする輩たちの手が / ひどければ ひどいほど / 善良な祖国の手も / はげしく それに答えた / 大邱駅前の 米よこせデモに対する大量虐殺事件には / 南部朝鮮全域にわたる幾つかの人民抗争でもつて答え」という言葉がある。許南麒が1946年10月以来の闘争をアメリカ軍政に対する抵抗運動として捉えていたことが窺われる。

7) 李景珉(2010)は、この事件を「確かに朝鮮共産党の指示によって触発されたものであったが、親日派が再び勢力を取り戻し権力を振るうことに対する民衆の反発、憤り、そして米の値段の冒頭による生活苦など、アメリカ軍政の失敗に対する反感が普通の人々を騒乱へと導いた」と解釈している。なお、マーク・ゲイン(1951)には、邱十月事件に関する現地レポートが収められている。著者は『シカゴ・サン』紙の日韓支局長を務めたジャーナリスト。

井上の小説「病める部分」は、「たとえ病める党の部分が、今、傷痕にみちみちていたとしても、なお祖国と民衆を壊滅の淵から防衛するものは党だけではないか。たとえ悲しくとも。たとえ悲しくとも。たとえ悲しくとも」という叙述をもって結ばれる。こうして、祖国と民衆を守る砦を、分派闘争を繰り返す「病める」党にしか求めることができないというディレンマを提示するところで作品は締めくくられる。

しかし主人公の「私」が立つS港には、許南麒の詩に刻まれた朝鮮半島における人民抗争の記憶を、「あの激しい闘いで汚れた白衣」を翻したのと同じ風が運んできている。別の許南麒の詩は、闘うべき相手は「祖国」のなかに「もう一つの異国を築きあげようとする輩たち」であるということ告げている。詩に歌われた「白衣」が喚起する「時の声」は、井上作品における革命家としての「私」に、みずからの敵の姿を教えていると言ってもよい。ところが内紛という党の病める部分は、本当に闘うべき敵の姿を見失わせる。「病める部分」という作品は許南麒の詩の言葉を借りて、そのことを告発しているように思われる。

なお、日本共産党は所感派の主導により「51年綱領」を採択、宮本顕治ら国際派幹部は自己批判書を書いて復党し、分裂はひとまず収束した。しかし党は武装闘争路線に転じ、大衆の支持を失っている。

第3章 戦後転向と文学主義

朝鮮における休戦交渉にもかかわらず、米本国よりの重火器、弾薬、食糧を満載した貨物船はりくぞくとして、この日本S港——朝鮮向け、輸送中継基地に入港した。

いやかえって休戦交渉一周年ぐらいから、港湾労働者は組織的に募集され、はじめ臨時に、後には長期作業員カード保持者として、忽ちに八千名を越えた。油タンク作業員、火薬庫作業員、輸送船係、運のよい者はトラック運転助手、病院、食堂の清掃係、そして職安と請負海運会社から行く三千名余りが、夫々日時によつて、或いは輸送船作業に、或いは岸壁弾薬積込作業に適当に配置されるのであった。

上は短篇小説「重いS港」の一節である(井上1952.10)。作品は朝鮮戦争の休戦交渉開始から1年を経た、1952年のS港を舞台とする。ここでは、港湾労働者の視点を通し

て、米軍の兵站基地と化したS港周辺の模様が描き出されている。

主人公大場国男は、港湾労働に従事する党员である。党员でありながら生活を米軍に依存し、「戦争のための荷物」の運搬に加担させているという欺瞞的な構図が、まずは設定される。大場は米兵による監督の下、缶詰のつまった木箱を輸送船に運ぶ労働に従事している。港湾労働者たちの間では、運搬物資を盗む行為や、米兵にウイスキーを高値で売りつける行為が横行している。大場は、缶詰を盗む坂本という人夫を見かねて咎めると、「つべこべ言うな」と殴られ、「赤なら赤らしゆうしとけ」との言葉を浴びせられる。

かつて大場は、他の党员の影響もあって、「この基地の輸送船の場合、はつきり目的を意識して作業をさぼり、意識して盗む(という言葉は適当でないが)ならばそれは許される。むしろ戦争を一ミリでも削り取るということで、それは積極的に組織化されねばならぬ」と考えていたという。しかしそれを欺瞞として打ち消し、「そのこのころのけじめをはつきりつけぬから本当の闘いがいつまでたつても組織できないのだ」と大場は考え直している。

井上はのちに本作執筆の意図について、「基地における輸送船作業の実態を戦争挑発者暴露の角度から小説またはルポルタージュにするつもりであった」と振り返っている。しかし、港湾作業にもぐりこんだ党员を取材する過程で、「目的意識の片もない《盗み》」が「敵の戦力を削り取る行為として臆面もなく合理化され」てしまうさまを目のあたりにする。そこで井上を選んだのは、普通の労働者の不正行為を党员主人公が制止するという設定を通して、「党(党员)の闘いの方法じたいに警告を発しようとする」ことであったという(井上 1953)。

本作が描き出す佐世保の地では、党员の生活の困窮は朝鮮戦争下の経済活動によって補われている。ここには、生活のための盗みがイデオロギーによって正当化されることへの批判を読むことができる。

大西巨人は、国際派の党员としての活動を九州で井上とともにした一時期を持つ作家である。大西は「重いS港」の主人公について、「彼は目の現実を階級闘争として捕えることができない」と述べ、本作では「盗み」や「ウイスキー売り」やが主として階級闘争の見地からではなく、主として純粹人間的・純粹道徳主義的な立場から批判されている」ことを批判した(大西 1952)。前作にもまして、小説「重いS港」の主人公の自己

意識は、革命家であることよりも生活者であることにほうに傾いている。井上は、前衛的な革命家の目的意識の欺瞞性を撃つための方法として、より自然生長的な生活者の道徳とヒューマニズムに立ち返ることを選んだのである。

その意味で、ここに見てきた井上の作品群は、1930年代、前衛的な革命運動の壊滅後に現れた転向文学の戦後的反復と見ることもできる。なるほど、革命の立場からすれば、こうした生活への回帰は後退を意味しているだろう。しかし、この「後退」した視点なくしては、朝鮮戦争の時代の佐世保という「辺境」の地が、戦後日本の矛盾と欺瞞を集約的に露呈させる場として作品に映し出されることもなかったに違いない。

井上が日本共産党を離党したのは、1953年のことであった。しかし井上自身の認識によれば、この選択は転向を意味しない。離党後、井上は「人間の生きる条件―戦後転向と統一戦線の問題」と題する評論を著している(井上 1954)。ここに示されているのは、鶴見俊輔が指摘するとおり、「日本共産党からは離党することがかえって、共産党をふくめた自主的な民主主義統一戦線をつくるのに役だつような情勢が戦後の日本に生まれたという情勢認識」である(鶴見 1962: 360)。井上はこのように書いている。

反共と非共とは明らかにちがうのであり、現在の状況では「転向」とは(文字本来の意味とは別に)戦争を挑発しようとする死の商人の一群・その勢力=人間の敵の群れ、に理論的(?)実践的に投ずる場合にのみ、使用すべきではないか。いわばスターリンの方法からハロルド・ラスキの方法への「転向」は転向ではなく、そう考えていくことで、各々の方法に違いはあれ、平和と人間の生きる条件を求めてたたかうことを共通の目的とする統一戦線の内部を、真に統一できるのではないか。「転向」をそのようにあつかうことで、本当の統一戦線を生みだしひろげる可能性が生れるのではないか。はっきりいえば、統一戦線から転落する場合を、私は「転向」と規定したいのだ。(井上 1954)

1954年に発表された右の一文は「戦後転向」を副題に掲げ、この曖昧な概念を明示的に規定するものとして、先駆的である。ここでは、戦争をも辞さぬ独占資本主義と保守勢力に抵抗すべく、マルキシズムとリベラリズムを包摂する「統一戦線」を維持することが、非転向の最低条件に数えられている。前衛党を離れるのではなく、統一人民戦線結成の試みから離脱することを、井上は拒否されるべき「戦後転向」と規定したのである。日本共産党は1955年の第六回全国協議会(六全協)によって、所感派主導の

武装闘争路線を「極左冒険主義」として自己批判し、宮本顕治ら旧国際派の覇権下に再統一された。しかし、その後も井上が党に復帰することはなかった。

藤田省三は、評論「昭和二十年、二十七年」を中心とする転向の状況の後半部において、GHQ占領が解除された1952年前後の井上光晴の動向を論じている(藤田 1962)。この評論が収められた『共同研究 転向』(平凡社)は、思想の科学研究会で行なわれた転向研究の成果を公にしたものであり、藤田の評論は井上を転向論の文脈に即して再評価するものである。

藤田によれば、皇国青年でありながら敗戦まもなく共産党に入党し、党の混乱のなかで離党した井上は、洋行知識人とは異質なインターナショナリズムを一貫して「内的基盤」としている。「下層人民の側に立つこと、そして朝鮮人労働者と連帯すること」が、それである。井上作品は「植民地の被圧迫人民が国家権力的また社会的圧力によって押し込められている場所は同時に抑圧国民社会から逐い出された人民の住む場所ともなる」ことを指し示す。それらは「ウルトラナショナリズムの戦中日本の中にも思想的意味豊かなインターナショナルな地点」がありえたことを探り当てており、この理念は井上が戦後共産主義へと転向し、さらに離党した後も持続している。このように論じた藤田は、戦後転向の状況下における非転向の可能性を、井上の「人民的思考」に見出した(藤田 1962:63-72)。

藤田の井上理解が、少年期の炭鉱生活、専検合格後の七高入学といった、嘘にまみれた自筆年譜—大西巨人の『三位一体の神話』が言うところの、「氏素性と年齢と経歴の三つに関する「伝説」⁸⁾——に基づく点で、瑕疵を含むことは否めない。しかし藤田も指摘するとおり、井上作品は被圧迫者によるインターナショナルな連帯の場所を舞台にとり、そこに内在する剥き出しのエゴイズムと重層する差別構造を可視化してやまない。このような「辺境」という場所をいわば根拠地とした井上の文学が、藤田のいわゆる「人民的思考」に立脚していることは確かなのである。

8) 大西巨人『三位一体の神話』には、井上をモデルとする(とらしい)葦阿胡右^{いけまひこあき}という小説家が登場する。

葦阿は、大西をモデルとする(とらしい)尾瀬路迂^{おせみちゆき}が、「氏素性と年齢と経歴の三つに関する「伝説」をあわせ持つ人物を描いた小説「三位一体の伝説」を執筆していると知り、みずからの虚言が露見することを怖れて尾瀬を殺害してしまう(大西 1992)。なお、大西と井上は九州での党员活動を介し、1948年より互いを知っていた。

ただし上のような評価とあわせて、藤田省三は当時の井上について「この人は党家産官僚主義と闘いそれからの精神的独立をから取った途端に文学主義になったのではないかと疑念を感じる」と記すことを忘れなかった。「党主義」から「文学主義」に転向してはなるまい。その方向線を消して革命的人民主義の方向線をもっと明確にすべきではないだろうか」と藤田は書いている(藤田 1962:65-66)。

1962年に記された藤田のこの諫言は、当時の井上がすでに「文学主義」に傾きつつあったことを受けたものである。事実、藤田は「ガダルカナル戦詩集」「虚構のクレーン」「死者の時」といった六〇年前後の井上作品をより詳細に検討する必要を説きながら、実際にはそうした作業に着手せず、この論文を途中で放棄してしまっている⁹⁾。藤田が危惧したとおり、革命家から小説家に転身した井上光晴は、次第に革命という契機を見失い、文学主義への転向の過程を進んだ。みずから警戒していた「戦後転向」を体現してしまったと言ってもよい。

ここで言う「文学主義」とは、必ずしも文学至上主義のことではない。かつて戸坂潤が記したように、「文学的表象でもつて実在(リアリティーとか真実とか真理とか呼ばれてゐる)を片づけて了はうといふ自慰的なやり方」(戸坂 1936:88)というのが、そのミニマムな定義である。こうした意味での文学主義は、すでに「書かれざる一章」に萌芽している。たしかにこの作品は、生活を度外視した組織の横暴を告発することには成功している。だが、革命家に無条件の献身を求める組織の現実的構造を、作品は解明しようとはしていない。

詩人の黒田喜夫は、本作の主人公が組織の圧力の前に歯を食いしばるばかりで抗議の声を上げようとしないこと、つまり本作が主人公の沈黙を通してその圧力を「抒情的に読者に訴える」にとどまっていることを批判している。「政治のメカニズムにたいするヒューマニティの抗議をもって主題とするのであるなら、もしそれが芸術の形象を求めるのであるなら、自己の被抗議者をも、自己の内部で解体し総合する過程をもたなければならない」と黒田は述べ、抗議の対象たる党組織のメカニズムを解明するという契機を持たないがゆえに、本作は「政治主義の誤ちをうら返した」にすぎないと批判した(黒

9) 藤田は『共同研究 転向』に発表した論文を『転向の思想史的研究—その一側面』(岩波書店、1985.5)に集成している。本書には井上光晴論にあたる「昭和二十年、二十七年」を中心とする転向の状況の第三節は収録されていない。

田 1957→1965 : 208-222)。ここでは党はあくまで文学的「表象」としてのみ立ち現われるのである。

結論

最初期から兆していた井上光晴の文学主義——黒田喜夫はこれを「俗流政治主義」と呼ぶ——を露顕させたのが、初期作品のモチーフを長篇として総合し、1965年に完成した『荒廃の夏』であろう。朝鮮戦争のもとで軍事基地と化した佐世保の風景や、米兵の遺体処理の仕事に携わる人物、レッドパージとコミンフォルム批判以後の分裂問題に直面しながら革命運動の可能性を模索する港湾労働者など、この作品に描かれた人物やエピソードの多くは初期短篇と重なっている。

作中には、本稿でも参照してきたような、所感派と国際派が都度発した声明文や綱領の類が数多く引用されており、作品はあたかも「五〇年問題」関連の資料集のような様相を呈する。しかし本作では、かつての作品のように革命運動の困難を批判的に捉え直すことよりも、複数の視点を並走させるフォークナー的な小説技法を具現化することのほうが自己目的化されてしまっている。のみならず革命家に従属を強いる不透明な抑圧者たる「日共」は以前の作品にもまして、ほとんど不可侵の対象として表象される。武井昭夫が井上の「批評精神の後退」を批判し、「死んだ過去としての題材を、神秘めかした曖昧さにおいて、なにか意味ありげに示しているにすぎない」と本作を糾弾した所以である(武井 1966→1967:11)。

ただし『荒廃の夏』には、上に見た初期三作品には見られなかった新しいエピソードがひとつ加えられている。佐世保の朝鮮人グループが、脱走した北朝鮮人民軍の兵士をかくまうというエピソードである。この兵士・崔塘は、北朝鮮に渡った日本人労働者の日記を日本共産党に託そうとしている。率先して彼をかくまおうとする青年・全峻は、事をあまり急がないよう、父にたしなめられる。全峻の脳裏には、前日に仲間と交わした議論が思い起こされてくる。

しかし、あの崔さんが…。全峻は胸の中で呟いた。それでも、崔さんは人民軍の兵士だからねえ。どうして日共はそれを信用せんのかね、という心のどこか

をよぎった朴三郎の声をのみこむように、彼は唾をのみこんだ。朴君がいたいの、日共は崔さんを人民軍の兵士と思ってないかもしれん、そういたいんじゃないか。彼は昨夜、そういったのである。しかし、いくらなんでも崔さんが人民軍の兵士かどうかを疑うのはおかしいだろう。それは崔さんに対する侮辱だからね、という孫楠男の声に対して彼はこたえた。ただ日共にしてみれば、崔さんのことはまだ何もしらんのだからねえ。日共がわれわれを絶対信頼しているのなら別だけど、そうでなければ、かくまってくれと申しでも、日共としては一応いろいろ考えるとそう思うんだ。(井上 1965a:296)

グループのメンバーは、「人民軍の兵士」であると自称する崔の処遇を「日共」に委ねているが、決断を避ける党に彼らは苛立つ。崔塘が本物の「人民軍の兵士」であるか否かを判断するのは党であり、本物であるにせよ、彼をかくまうべきか否かを判断するのもまた党である。したがって党の承認なくしては、朝鮮人民との連帯はありえない。ところが作品は結末にいたってなお、党がどのような判断を下したかを明らかにしていない。こうして末端党員の呼びかけに応答することのない党は、辺境におけるインターナショナルな連帯をむしろ寸断する存在として表象＝イメージ化されている。

改めて振りかえれば、初期短篇では、朝鮮戦争の時代の佐世保はあくまでも職業革命家であり生活者でもある主人公の視点から捉えられていた。この視点からは、佐世保の地に隠されたもうひとつの問題、つまり朝鮮人民の解放という問題が見えてこない。

だからこそ「病める部分」に許南麒の詩が引用されていたことは示唆的である。ここでは、政治ではなく文学の経験を通して、「鍬と鎌と洗濯棒を振上げて、口々に何かを喚く朝鮮人の姿が想像されていたからである。この引用は、詩の言葉を読むという文学的経験を、朝鮮戦争の時代における佐世保での政治的経験と接合する試みであると言える。この段階ですでに、政治が目に見えないものにしてしまった朝鮮民族の解放運動と日本の革命運動の連携可能性が、文学の言葉を通して初めて見出されていたのだ。『荒廃の夏』では、かつての作品が薄明のなかに見出したこの連帯の可能性を、虚構として具象化することが試みられるのである。

井上はその後も持続的に、朝鮮戦争の時代にありえた日本の職業革命家と朝鮮人との連帯の可能性を、「辺境」を舞台として問い続けた。しかし井上にとって、それはあくまでも政治ではなく文学の問題である。在日朝鮮人とのインターナショナルな連帯の

可能性を、井上は文学の権能において取り戻そうとしている。井上の「文学主義」を肯定的に捉え返す論理がありうるとすれば、その根拠は、政治が置き去りにした連帯の可能性を、テキストの引用、イメージの駆使、あるいは虚構の設定といった文学に固有の方法によって一連の作品が指し示しているところにこそ求められるであろう。

■ 参考文献

- 中田幸子(2021)『叛逆する精神—評伝藤森成吉』, 国書刊行会, 第7章.
- 李景珉(2010)「朝鮮戦争—内面的アプローチ」, 『比較文化論叢』札幌大学文化学部.
- 丸川哲史(2005)「朝鮮戦争という劫火」, 『冷戦文化論』双風社.
- 吉田永宏(1999)「解題」, 関西大学図書館編[復刻版]『えんぴつ』, 関西大学出版部.
- 川西政明(1998)「井上光晴年譜」, 井上光晴『十八歳の詩集』, 集英社.
- 大西巨人(1992)『三位一体の神話』, 光文社.
- _____ (1952)「先頭部隊の責任」, 『新日本文学』11月.
- 谷沢永一(1992)『回想 開高健』, 新潮社.
- _____ (1950)「井上光晴『書かれざる一章』読後」, 『えんぴつ』8月.
- 佐世保市(1975)『佐世保市政七十年史 上巻』, 佐世保市.
- 武井昭夫(1966)「批評精神の後退について」, 『新日本文学』11月.[武井昭夫(1967)『批評の復権』晶文社.]
- 針生一郎(1966)「いま何が必要か—文学運動の自己革新」, 『新日本文学』4月.
- 井上光晴(1965a)『荒唐の夏』, 『新日本文学』, 1962年9月~1965年10月, 河出書房新社.
- _____ (1965b)「解説」, 『井上光晴作品集 第一巻』, 勁草書房.
- _____ (1954)「人間の生きる条件—戦後転向と統一戦線の問題」, 『近代文学』11月.
- _____ (1953)「私の立場と方法」『文学評論』10月.
- _____ (1952)「重いS港」, 『新日本文学』, 1952年10月.
- _____ (1951)「病める部分」, 『新日本文学』, 1951年8月.
- _____ (1950)「書かれざる一章」, 『新日本文学』, 1950年7月.
- 鶴見俊輔(1962)「転向論の展望—吉本隆明・花田清輝」, 『共同研究 転向 下』, 平凡社.
- 藤田省三(1962)「昭和二十年、二十七年」を中心とする転向の状況」, 『共同研究 転向 下』, 平凡社.
- 黒田喜夫(1957)「『書かれざる一章』とその周辺」, 『現代詩』3月.[黒田喜夫(1965)『死にいたる飢餓』国文社.]
- 江口渙(1951)「文芸時評」, 『新日本文学』, 11月.
- 江馬なかし[修](1951)「文学の大衆路線へ—なかの・しげはるの「人民文学と江馬の言葉」をよんで」, 『人民文学』2月.[江馬修・藤森成吉(1950)「黨員文学者諸君に訴う」
- ゲイン, マーク(1951)『ニッポン日記 下』, 井本威夫訳, 筑摩書房.

- 中野重治(1951)「嘘と文学と日共臨中」,『新日本文学』5月.
- 新日本文学会第五回小説委員会(1950)「勤労者作家の作品とその態度」,『新日本文学』9月.
- 日本共産党新日本文学会中央グループ(1950)「党中央に巣くう右翼日和見主義分派に対するわれわれの態度—党のボリシェヴィキ的統一のために」【編者未詳(1951)『日本共産党党内闘争文献集 後編』生活書店】
- 日本共産党臨時中央指導部(1950)「新日本文学会中央グループ内の一分派主義者の声明について」,日本共産党臨時中央指導部編『斗いは人民の信頼のもとに—日本共産党臨時指導部決定集』,日本共産党東京都委員会出版.
- 平野謙(1950)「職業革命家の問題—25年度文壇の回顧」,『群像』12月.
- 許南麒(1950)「六人の朝鮮人の歌」,『新日本文学』11月.
- _____ (1949)『詩集 朝鮮冬物語』,朝日書房.
- 戸坂潤(1936)「モーラリストの立場による科学と文学」,『思想としての文学』,三笠書房.

DOI : 10.18075/jcs..92.202410.057

■ Abstract

Problematising the frontier in Mitsuharu Inoue: Sasebo in 1950

KAJIO Fumitake

This article examines how writer Inoue Mitsuharu, a member of the International Faction (anti-mainstream faction) of the Japanese Communist Party, confronted the contemporary situation under the Korean War. Inoue wrote 'The Unwritten Chapter', which is directly related to the party's factional strife (the '50 Problem), and in the following "The Sick Part", while describing the situation of the factional strife, he sought the possibility of solidarity with the Korean people by quoting the words of a poem by Nam-Gi Heo. In 'Heavy S Port', the city of S, which has become a logistics base for the US military, is depicted from the perspective of a dock worker. After leaving the Communist Party, Inoue defined the phenomenon of the political conversion in post-war not as a departure from the party, but as a departure from the 'Front populaire' that encompassed Marxism and liberalism. Fujita Shozo appreciates that the 'frontier' of Sasebo, the setting of Inoue's novels, could have been an international point of solidarity with the Korean people, but criticises Inoue's latent inclination towards 'literarism'. This tendency is evident in his long novel *The Summer of Desolation*, which synthesises the motifs of his early short stories, but Inoue was trying to point to the possibility of 'solidarity' that politics had left behind through a method unique to literature.

Key words : Mitsuharu Inoue, Shozo Fujita, Nam-Gi Heo, the 1950 Problem, the Korean War

■ 日本語抄録

井上光晴における「辺境」への問い

- 1950年・佐世保 -

梶尾 文武

日本共産党国際派(反主流派)に所属した作家井上光晴が、朝鮮戦争(韓国戦争)下の時代状況にいかに対峙したかについて考察する。井上は党の分派抗争(五〇年問題)に直接関係する「書かれざる一章」を著したのち、続く「病める部分」では分派抗争の状況を描きつつ、許南麒の詩の言葉を引用することによって朝鮮人民との連帯の可能性を模索した。さらに「重いS港」では、米軍の兵站基地と化したS市の模様が、港湾労働者の視点を通して描き出される。共産党を離れた後、井上は、「戦後転向」という現象を党からの離脱ではなく、マルキシズムとリベラリズムを包摂する「統一戦線」からの離脱として規定した。藤田省三は、井上が小説の舞台とした佐世保という「辺境」が、朝鮮人との連帯を可能にするインターナショナルな地点たえたることを評価する一方で、井上に潜在する「文学主義」への傾斜を批判する。そうした傾向は、初期短篇のモチーフを総合した長篇『荒廃の夏』に顕著だが、井上は、あくまでも文学に固有の方法によって政治が置き去りにした「連帯」の可能性を指し示そうとしたのである。

キーワード：井上光晴、藤田省三、許南麒、五〇年問題、朝鮮戦争

<필자인적사항>

성 명 : 梶尾文武(KAJIO Fumitake)

소속(직위) : 神戸大学准教授

연락처(이메일) : krweiwei@tiger.kobe-u.ac.jp

투고마감일 : 2024.7.30

심사개시일 : 2024.8.15

게재확정일 : 2024.9.15